

聖書の祈りが私の祈りになる（新約編）

第8章 祈りについてのキリストの教え②



求めているものをいただく



イエスは、私たちが祈りの中で求めているものをどのようにしていただくことができるかについて、教えてくださいました。

「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます」（ヨハネ 15:7）。

キリストに「とどまる」というのは、どういう意味なのでしょう。キリストのみことばが、どのようにすれば私たちの内に留まるというのでしょうか。求めるものをいただくというキリストの約束の成就を見るためには、私たちはこれらの問いに対する答えを知らなければなりません。ここで、祈りに対する答えを得るといふ約束の中でも最も包括的なものは、おそらくヨハネの福音書 15 章 1-11 節です。「何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます」とあるわけですが、そこには条件があります。祈りの答えに対してそこまでの確信に至るためには、用いなければならない鍵があるのです。「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら」という鍵です。

「とどまる」は、ヨハネ 15 章 7 節の中で最も重要な結果をもたらす言葉です。これはギリシア語の「メノー」から派生した言葉で、「（与えられた場所や状態、関係に）留まる」ことを意味しています。ここで用いられているように、これは、神秘的にして非常に現実的な交わりやパートナーシップにおけるクリスチャンとキリストご自身の関係 --- 一致、一体化、「コイノニア」（交わり、分かち合い、パートナーシップ）、すなわち互いに密接に関係している状態 --- について語るものです。これが、クリスチャンの祈りが無条件で叶えられるために必要な条件なのです。しかし、留まるということは、「キリストにとどまる」以上のことでなければなりません。その

具体的な制限は、「あなたがたがわたしにとどまり、(そして) わたしのことばがあなたがたにとどまるなら」(括弧内著者) という二つです。キリストのみことばが私たちの内に留まるのを許すということを含むものでなければなりません。この二つの条件は、互いにバランスを保ちながら存在するペアとなっています。これは、クリスチャンにとっての規範であるべきです。キリストの内に留まるクリスチャンと、クリスチャンの内に留まるキリストのみことばというわけです。お互いがお互いを補い合い、力を与えるものであるわけですから。ここで「ことば」と呼ばれているものには、イエスによって語られた言葉や、イエスに従う人々が聞いた言葉、ほぼ福音書だけに記されている言葉のみならず、それ以上のものが含まれています。そこに含まれるのは、神の靈感によって与えられた(Ⅱテモテ 3:16) 神のみことば全体、聖書のすべてです。自らの歩みが神のみこころにかなう者になりたいと願うクリスチャンは、どこまでもみことばに満たされなければなりません。みことばが紛れもなく自分の一部となり、自分の内に留まるところにまでならなければならないのです。これはただ、みことばの内に歩むという厳しい修練によってのみ可能となります。そのような修練は、放っておいて勝手に起こる類のものではありません。実現させたいという固い決意からもたらされるものなのです。

求めるものをただけるという可能性は非常に魅力的なのですが、ここで誘惑となるのが、その約束を条件から切り離してしまうということです。人間の性質としては、「何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます」という約束の響きを好むものですが、約束が、明確に要求されている事柄から独立して効力があると考えれば、それは単なる希望的観測に過ぎません。

キリストを信じる者がそのみことばに満たされ、キリストとの一致を何にもまして意識的に捉え、キリストの思いで満たされ、キリストの目指しておられるところに燃え、その言葉に満たされているなら、その者は、神のみこころに沿わない思いは何も抱かないことだろう。このとき、その者自身の願いの実現において、信仰は可能となり、祈りは預言、答えの先取りとなる。……これこそが真に祈りの哲学なのである。

イエスの説明によれば、常に答えられる祈りとは、賜物としての聖霊を切に求める祈りだということです。聖霊はこの世界にご臨在し、罪人に罪を示して悔い改めへの確信を与えるとともに、人がイエスを信じる時に新生をもたらすという働きを担っておられます。聖霊はさらに、「助言者」として(慰め主、パラクリート、助け主: ヨハネ 14:16)、かつ、イエスを信じる者に救いの確証を与えるお方として(ローマ 8:16)、その人に内住しておられます。ですから、クリスチャンが父なる神の約束 --- すなわち、効果的な証しのための力を与えてくださる、聖霊という賜物 --- を求めることは大切なのです(使徒 1:4,8, 2:4)。

しかし、サタンは欺く者の頭です。人々が神の祝福と備えを味わうことがないようにと、できることは何でも試みてきます。クリスチャンにとって最大の助け主である聖霊から引き離すことにおいても同様です。サタンは、恐れという効果的な道具を用い、聖霊を切に求める者に対して、おまえが受けるのは悪霊かもしれない、偽物かもしれない、肥大した妄想の犠牲者であるかもしれない、などという考えを吹き込んでくるのです。しかし、このようにして悪影響を受けてしまった人々のために、イエスは答えをお持ちです。

あなたがたの中で、子どもが魚を下さいと言うときに、魚の代わりに蛇を与えるような父親が、いったいいるのでしょうか。卵を下さいと言うのに、だれが、さそりを与えるでしょう。してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありましよう。(ルカ 11:11-

13、マタイ 7:11 参照)

イエスはこの箇所、人間の親が子どもに接する姿との単純な比較によって、父なる神の高潔さを強調しています。ここで、子どもは父親に願いごとをしています、魚を求めたのに蛇を受け取ったり、卵を求めたのにサソリを受け取ったりといった、受け入れ難いもの、恐ろしい偽物を手にするようなことは起こっていません。地上の父親 --- 神のきよさや素晴らしさと比べれば悪しき存在 --- が良い贈り物を与える方法を知っているのであれば、私たちの「聖霊に満たしてください！」という子どものような懇願を神が聞いて下さらないはずがないのです。神は善の極みのようなお方であり、これはとりわけご自身が創造され、そして墮落してしまった人間に対して表されるものであり、「求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありますか」(11:13) と言われるとおりのことです。

したがって、聖霊を与えてくださいと父なる神に願うこと、そして、真摯な心でそう祈ったからには神の側で裏切られるようなことはない、と確信することは、すべてのクリスチャンにとって特権かつ義務なのです。彼らは願い求めたものをいただくのです。

答えられる祈りについて、イエスはまた別の約束を与えてくださっていますが、これは一見、願い求めるものは何でもいただけると確信させるようなものに思われます。「まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます」(マタイ 18:19)。

人間の霊を調和させる、あるいは一致させる霊的な力というものは、簡単には理解できないものです。主はここで「心一つにして」という表現を採用しておられますが、これはギリシア語の「スュンフォネオー」(~と合う、適合する、調和している)という単語で、「スュンフォノス」(調和的な、共鳴して聞こえる、合意している)にも関連しています。神の力学の中では、二人という、一致に必要な数としては最小の数の人々が一致するところから、力が解放されるというのです。自然界ならば私たちは、同様の力を持った二つの存在は、一つの持つ二倍の力を行使すると計算します。二頭の馬であれば、一頭の引くことのできる二倍の荷を引くことができますし、二トンのダイナマイトならば、一トンの持つ爆破力の二倍の力を発揮するというわけです。しかし、物理的な世界であっても、特殊な合成が生じる際には、比例的な増加を超えた事柄が成し遂げられるような証拠も存在します。例えば、集団力学の研究によれば、あるプロジェクトにおいて十人が一致して作業をしたところ、同じ十人が同じプロジェクトにおいて別々に作業をしたよりも多くの結果が得られたということです。同じ原理は聖書でも認識されており、それは、一人が「千人を追い払う」ことができるところを、どのようにすれば二人が「万人を追い払う」ことができたかを観察しているところに見られます(申命記 32:30)。主の助けがあれば、一人のクリスチャンが千人を追い払うことができるところ、二人なら、同じ助けをいただくとその十倍の数を追い払うことができるというのです。

合意、一致、調和、あるいは心一つにすること --- これらはいずれもキリストの御体に深いダイナミズムをもたらしてくれます。この真理を強調すべく、神は、「もし、あなたがたのうち(たった)ふたりが、どんな事でも、地上で心一つにして」(括弧内著者)というように、同一方向への最小限の動きに対してすら、約束を与えてくださっているのです。ペンテコステの日に 120 人が完全な調和と一致で集まっていたとき、天にはどれほどの喜びがあったことでしょうか。ならば、神がその最初のクリスチャンの群れに、ご自分の御霊によって御業を注ぎ込まれたとしても何ら不思議ではありません。そして、そのみわざは、今もお全世界に影響を与えるもの

となったのです。

クリスチャンは誰しもキリストの御体の一部であり、その一員です（Iコリント 12:27 参照）。そのような存在として、私たちは誰もが、神が与えてくださるもの、約束してくださっていることを、下さいと求める権利と特権が与えられているのであり、まさにそのようにすべきです。とはいえ、神はその子どもたちに、独立と自律を願っておられるわけではありません。なぜなら、私たちはみな「からだの一部分」（エペソ 4:25）だからです。クリスチャンが一つとなることに対し、神は、それが真心からの動きであれば、どのようなものでも大いに喜んでくださいます。そして、二人という少人数であっても心をつととするならば、私たちに天の倉の鍵を与えてくださるのです。

しかしながら、心を合わせること、あるいは一致することには、「どんな事でも」という修飾句がつけられています。これは、心を合わせることと、求めるに際しての枠組みのようなものです。すなわち、求められる対象は、音楽でいう和声の基盤となり、神の心に触れる聖なる交響曲となるのです。この条件は、神に何かを求めるために単に一致するという以上のことです。これは、人々の魂の内へと深く働く一致であり、その魂は、一つの共通の願いに向けて互いに美しく共鳴し合うものとなっています。そして、それゆえ、彼らの魂はその願いをめぐり、天的な調和の内にあるのです。「どんな事でも」という表現は、表面的には何の制限も限界もない約束であるかのように思われます。しかし、聖書のみことばは、どの節にしても、またどの主題についても、他の明確な教えから切り離して捉えてはなりません。すなわち、「どんな事でも」というくぐり、聖書の「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださる」（Iヨハネ 5:14）や、「願っても受けられないのは、…悪い動機で願うからです」（ヤコブ 4:3）などのみことばによって規定されなければならないのです。当該の箇所にあるように、二人のクリスチャンがそのような一致と調和に導かれるなら、彼らが求めることは、悪しき野心や願望 --- それが不法なものであれ、純粹に人間的なものであれ --- から生まれたものではなく、主のみこころに沿ったものとなるのです。